大谷学会研究発表会要旨

「ジャン・パウルとコールリッジ　再考
—想像力と空想力の区別—」

本学教授　山下　登

「ジャン・パウルとコールリッジ——想像力と空想力の区別」と題して、関西コールリッジ研究会において、去る六月二十一日、同志社女子大学デントン館二階において発表致しました。その折、先生方から色々質問があり、その質疑応答から、それをたたき台にして、もう一度、私が今この問題について考えていることを発表させて頂きます。従って、「ジャン・パウルとコールリッジ——想像力と空想力の区別——」再考であります。先づ同志社女子大学において、どの様な話をしたかと云うことから始めます。

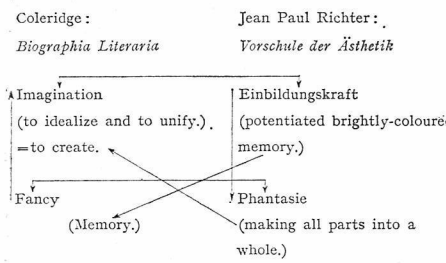
ジャン・パウルはウィルヘルム・シュレーゲルやフリドリッヒ・シュレーゲルと共にドイツ浪漫主義理論の指導者でありました。彼が著した "*Vorschule der Ästhetik*"（『美学入門』）はドイツ浪漫主義理論の劃期的な書物でした。コールリッジはこれを読んで居ました。コールリッジはワーズワースと共にイギリス浪漫主義の暁将であり、『クブラ汗』、『エンシェント・マリナー』、『クリスタベル』等イギリスにおいて最も美しい、浪漫主義の詩を作りました。又イギリスにおける浪漫主義理論、想像力説の解放者でありました。私はイギリスのコールリッジへのドイツのジャン・パウル・リヒターの影響について論ずる者であります。特に想像力と空想力の区別についての影響であります。

ジャン・パウルは『美学入門』、第一部、第二章 "Stufenfolge poetischer Kräfte"（「詩作能力の階程」）において、Einbildungskraft と Phantasie について区別しました。コールリッジは、*Biographia Literaria* は第十三章において Imagination と Fancy とを区別しました。これについて影響が有ったか、無かったかと云う問題であります。若し影響が無ければ、世界史における、とりわけ人類学における、文化史における、人間とは時を同じゅうして同じことを考える、著しい思考の類同として捕えることが出来ます。しかし私は影響があったものと云う観点から話を進めます。

ジャン・パウルは『美学入門』において、Einbildungskraft には、J. Shawcross の英語を借りれば、"potentiated brightly-coloured memory"（「有力な、明るい色をした記憶」）と定義して居ります。又一方 Phantasie は "making all parts into a whole"（「あらゆる部分を一つの全体に構想する」）能力と規定して居ります。コールリッジは『文学的伝記』において、Imagination が Fancy より高い能力であり、Imagination は "to idealize, to unify"（「理想化し、統合する」）能力と規定して居ります。一方 Fancy は "Memory"（「記憶」）を扱う能力と云って居ります。ヨーロッパではジャン・パウルも含めて、Einbildungskraft よりも Phantasie の方が一段高い能力と考えられて居ました。コールリッジのものとジャン・パウルのものを図表で示すと次の様になります。（次頁）

イギリスでは Imagination は十四世紀頃ラテン語の Imagin-

atio から輸入され、Fancy はギリシャ語の Phantasie から十六世紀頃イギリスに輸入されました。この二つの言葉の感じから、同じ様なことを意味しながら、全く異った感じを与えることを Thomas Hobbes や Joseph Addison は気が付いて居りました。コールリッジは古典の愛好家として、恐らく約百四十五年前の Hobbes の *Leviathan* や約九十五年前の Addison の *The Spectator* を読んで居りました。コールリッジは *Biographia Literaria* 第四章において、Imagination と Fancy の区別は我が国において最初であるという信念を抱いて居た時期があったと言って居りますが、イギリスには段々と Fancy より Imagination を重く見る考えが形成されつつあったのであります。これについては拙論、『コールリッジ以前の想像力と空想力の区別』(大地社、昭和五十四年発行)を御参照下さい。コールリッジは二十四歳(一七九六年)にワーズワースの *Female Vagrant* によく似た詩をワーズワースから朗読して聞かされ、この詩がどう云う能力から生れたのか、幾度も冥想して考えた結果、Imagination と Fancy と云う能力を思い付いたと云って居りますが、実は定義こそして居なかったが、この考えが Hobbes や Addison に有った事であります。*Biographia Literaria* を出版するのは一八一七年でありますから、これを思い付いた一七九六年からしますと、約二十年程この問題を考えて居たことになります。Jean Paul Richter の『美学入門』が出版されたのが、一八〇四年でありますから、コールリッジが考えて居た年月の射程内に入って来ます。



Einbildungskraft: potentiated brightly-coloured memory. (Shawcross)
=potenzierte hellfarbigere Erinnerung. (Jean Paul)

Phantasie: making all parts into a whole. (Shawcross)
=Die Phantasie macht all Teile zu Ganzen.——
sie totalisieret alles, auch das unendliche All.
(Jean Paul)

コールリッジは一八〇二年九月十日に W. Sotheby に宛た手紙の中で、"Fancy, or the aggregating Faculty of the mind. Imagination, or the modifying and co-adunating Faculty."(「空想力、即ち集合的能力。想像力、即ち修飾的合着能力」)と云って居ります。co-adunating と云うのは珍らしい言葉ですが、*Oxford English Dictionary* を引くと、"To join together into one, to unite, combine." となっています。筆者は最初「合着」と訳しましたが、「結合する」と云う意味であります。空想力が「集合的能力」であるに対して、想像力は「結合的能力」であります。「集合的」より「結合的」の方が重いと考えられますので、コールリッジは空想力より想像力の方が重いとここで考えて居た事になります。同志社女子大学での話は、*Vorschule* の一八〇四年よりもコールリッジの一八〇二年の方が早いじゃないか、ここが問題になりました。

Thomas Middleton Raysor はコールリッジの *Shakespearean Criticism* (1967) の中で、「リヒターの『美学入門』に対する想定される負い目は、一寸目には尤もらしいけれど、コールリッジが

リヒターから由来していたかも知れなかった考えの総てを、リヒターの書物が出版された二年前の一八〇二年の一通の手紙においてはっきりと表現していた事実によって、それは不可能とされるという事を指摘することは一方意義あることである。」と云って居ます。一八〇二年の手紙と云うのは先に挙げた W. Sotheby 宛の手紙を指して居ます。リヒターの『美学入門』は一八〇四年に出版され、コールリッジの W. Sotheby 宛の手紙は一八〇二年であるから、Imagination と Fancy との区別についてリヒターから影響を受けて居ないと云うのであります。成程一八〇四年より一八〇二年は早いですし、コールリッジが始めからしっかりした考えを持っていたことは事実ですが、一七九六年から一八一七年の約二十年間この問題について考え続けた、その中に一八〇二年も、一八〇四年もすっぽりと含まれるのであります。従って、コールリッジが他人に振り廻されない、しっかりした考えを持っていたことは事実ですが、ではリヒターから影響を受けなかったかと云うと、そうはならないと思います。コールリッジには趣味の基準の様なものがあって、自分の提起する問題について、関連している総ての書物を読むと云う研究方法を取っています。コールリッジが想像力と空想力の大詰めの決論を出すのは一八一七年ですから、一七九六年より約二十年間、それに関連するあらゆる書物を読んだと思います。又一八〇二年のコールリッジの言葉は具体的でありませんでした。従って、リヒターのものも読み、参考にし、影響を受けたと思います。

又 J. Shawcross は一九〇七年にコールリッジの *Biographia Literaria* の決定版を出版した時、想像力と空想力について、脚注において、次の様な注を付けました。「Jean Paul の *Aesthetik* における Einbildungskraft と Phantasie との区別（即ち Einbildungskraft は『有力な、明るい色をした記憶』の意で、Phantasie は『各部を全一に統合する力』の意）はコールリッジの区別を確かに想わせる。然しコールリッジが Jean Paul に何らか負うているところがあったということは不可能である。彼は一八一七年においてさえ、*Aesthetik* を『ほんの一寸のぞいた丈』であったから。」

J. Shawcross は一八一七年十二月十三日付の J. H. Green 氏宛のコールリッジの手紙、「*Aesthetik* を『ほんの一寸のぞいた丈』」という言葉を論拠に一八一七年七月に出版されたコールリッジの *Biographia Literaria* への Jean Paul の *Asthetik* の影響が無かったと断定しています。

しかし Alois Brandl は *Samuel Taylor Coleridge und die englische Romantik* (1886) の中で、「コールリッジがその場合、*Vorschule* をよく知っていたと云うことは、古いギリシャ悲劇において、合唱がなした様に、シェイクスピアの劇のために道化が同じ役割を演じていたという一八一一年一月二十九日のロビンソンに対してなされた評言によって示されている。というのはジャン・パウルは同じ評言をしている。そして同じ考えが二人の異なった人に独立に起ったと云うことは殆どあり得ない。*Vorschule* から彼が集めたものは『空想力であるより低い意味』における概念の能力と『想像力であるより高い、創造的な意味』における概念の能力との区別であった。」と云っています。従って、一八一七年にコールリッジが Jean Paul の「*Aesthetik* を『ほんの一寸のぞいた丈』」という言葉は真赤な嘘であり、一八一一年頃に Jean Paul の *Asthetik* を読んで居たことになります。

その外、多くの学者がコールリッジへの Jean Paul の *Vorschule*の影響を認めています。Laura Johnson Wylie は *Studies in the Evolution of English Criticism* (1894) の中で、「コールリッジの批評はあらゆる処でリヒターの影響を示している。彼は *Die Vorschule der Asthetik*(『美学入門』)から想像力と空想力の区別の如き基本的な考えを引いているのみならず云々。」と云っていますし、Logan Pearsall Smith も *Words and Idioms* (1925); *Four Romantic Words* の中で、「Brandl はその著 *Life of Coleridge* において、コールリッジが Genius (天才) と Talent (才能) との間に立てた区別を Jean Paul Richter の著述の読書からその源泉を得ている。そして又 Fancy と Imagination という『より高次の創造的な』能力との間の有名な区別も同じ源泉からその資料を得ていると述べている。」と云っています。又 René Wellek は *A History of Modern Criticism* (1955) の中で、「コールリッジの『機智と諧謔』についての講義の原稿は Jean Paul の *Vorschule* からの引用の寄せ集め細工である。」と云っています。従ってコールリッジは確かに Jean Paul Richter の *Die Vorschule der Asthetik* を読んでいました。

筆者は Raysor や Shawcross の学説に対して Brandl や Wylie や Logan Smith の学説を紹介して来ましたが、Brandl や Wylie や Smith もコールリッジが Jean Paul Richter から影響を受けたと云いながら、どの様な影響だったか、明らかにしなかったのであります。私見を示しますと、コールリッジは Jean Paul の Phantasie から Imagination の意味を詰め込んだ、又 Einbildungskraft から Fancy の意味を詰め込んだと言いますか、コールリッジはそれを暗に示すかの様に、*Biographia Literaria* 第四章において、想像力と空想力について次の様な言葉を述べています。「証明しなければならないまず第一の、そして最も重要な点は、全く異なった二つの観念が全く同一の言葉のもとに混同されていることであって、(これが証明されたならば) 次には、その言葉にもっぱらある一つの意味だけを充当し、類語に対しては (もし類語があれば) 他の意味を充当することである。」

この言葉はコールリッジが意識的にジャン・パウルのものを逆に組み入れたことを暗示して居り、筆者がコールリッジが自ら意識しなかったことを筆者が指摘しているのだと同志社女子大学のコールリッジ研究会では云われた先生も御座居ましたが、筆者はコールリッジが意識的に Jean Paul の *Vorschule* の Phantasie と Einbildungskraft の意味を Imagination と Fancy との意味に逆に組み変えたと云いますか、入れ変えたと云いますか、勿論コールリッジにはそうしたいという意図は初めからあったわけですが、Jean Paul の *Die Vorschule der Asthetik* を見て、自分の考えとは逆になっていることを意識し、Jean Paul のものと意味を逆に組み入れたと考えられます。今日、Imagination と云えば、「想像力」、「想像力」と云えば、Imagination と云うのも、英語、日本語の世界では、Imagination の意味を高めたコールリッジの貢献する所大であったと云わねばなりません。コールリッジが Imagination と Fancy の意味を Jean Paul の Phantasie と Einbildungskraft の意味から逆に組み入れたと云うのが筆者の学説であります。これが逆になっていることを摘指したのは謙虚さを欠きますが、世界で、山下が最初でありまして、日本を代表して、世界にこの学説を呈示致します。